



中
將
娘
式
記

特別
イ 4
3163
213



中將姫一代記卷之壹

中將姫誕生之事

抑中將姫の縁由を尋ふ人皇軍五代聖武天皇
 其御宇從一位右大臣藤原原の朝臣豐成公の嫡男なり次男は太政大臣
 藤原原の孫正一位武智麻呂の嫡男なり次男は太政大臣
 原の仲麻呂と名く豐成公の嫡男なり次男は太政大臣
 天子に事て和漢の文を達し公此政を執るは
 民とあはれとなふが故に法を敷ひ崇ひたり漢代家信
 に國を將監時常其子孫を命つるは日良時業と



人はつとち獲このまわし一むいなまじバ威智日たてまつのまじ一いせい家門いん景代のいん舞いん
昌いんは時いんをりしいんらいんやまいんのりいんるいんあいんりいんらいんりいんあいんにいん津いん糸いんのいん糸いん
天いん系いん九いん事いんのいんよいんあいんまいんじいん帝いん御いんのいん例いんまいんくいん沖いんのいん糸いんをいんりいんなりいん
一いんをいん典いん業いん津いん糸いんをいん目いんひいんまいんくいん一いんをいんついんついんせいんどいんもいん其いんのいん糸いんをいん
ないんまいんじいんばいん時いんのいん博いん士いんといんまいんるいんくいんらいんせいんたいんらいんふいんよいん先いん代いんのいん津いん邊いん成いんありいん
一いん者いんのいん無いん靈いん山いん宗いんといんをいんすいん故いんないんりいんといんやいんくいん志いんのいん見いんむいんといんたいんじいん
けいんりいんもいんよいんういんついんていん法いんのいん法いん山いんよいん今いんといんていんかいん持いんりいん勝いんといんりいんくいんなりいん
一いんかいんどいんもいんのいんあいんりいんもいんないんりいんらいんらいん豊いん成いん郷いんのいん朝いん庭いんよいん糸いん糸いん一いん
をいんりいんあいんりいん子いんびいん志いんあいんりいん一いんないんりいんあいんらいんまいん城いんのいん御いんのいん内いんのいん下いんにいん

わいんりいんあいんらいん一いんむいんたいんにいんおいん高いん他いんをいんのいんまいんういんまいんていん其いん人いんのいん糸いん糸いん
りいんれいん妖いん怪いん赤いんさいん髪いんをいんといんといん一いんまいんふいんこいん六いん日いん此いんどいんくいんないんるいんものいん
津いん殿いんをいんあいんりいんんいんていんまいんりいんりいん豊いん成いんはいん津いん邊いんあいんついんくいん是いんこいんもいん津いん
腦いんをいんないんまいんといん曲いんぬいんあいんらいんのいんといんちいんのいん扱いんをいんをいん一いん長いん子いんないんまいん六いん妖いん怪いんをいん
威いんよいんをいんまいんれいん集いん極いんをいんのいんあいんらいんんいんといんまいんらいんあいんをいん背いんよいんういんゆいんりいんといん切いん
付いんあいんらいんハいん名いん化いんのいんちいんかいんらいんふいんまいんしいんといんついんきいんといんふいんといんまいんしいん極いんよりいん下いんへいんおいん
らいんあいんをいんむいんくいん押いん伏いんせいんくいんびいんかいんきいん切いんくいんちいんのいん先いんないんはいん津いんがいんぬいんきいんをいん見いん
やいんういんそいんういんせいんぐいんらいんないんらいん一いん怨いん鬼いんをいん豊いん成いんたいんいいんといん志いんをいんりいんといん
はいんりいんらいんむいんふいんをいん林いん中いんにいんいいんのいん法いん將いん長いんといんまいんかいんけいん付いん津いんのいん糸いん糸いん

後を感當せざるにたりたりふも来たるつをこそ歎より
此御のおんころり後をく平念申しく丸れをち子
も豊成つものらんころとあひぞん者て御感申し御あ
むとて二夜の侍後は宗の希も市官女の中もそと官色
むれいなるを賜り種々の引かお賜りしは豊成にも首
がく退きありて吉日をあらみ婚姻首尾よくとのひ
ありあがりより心来比しく此御の連理の交りは
びしてすかひのころころとて豊成つとほをく中々
よ及びなむとくし御よ一人もまよまよとねとくしとあが

あむりしより御めいのりかひもあるものをと夫婦
心を合せあむ御誓ひとあんじやうしふ清んとて常
時業あ人も御家人百具せられ糸紡りて幣帛と持
一人の子をあらしませし母誠をいらしめきたあふ
ふしやせむし御めあむとあむし現もしゆらと寶殿
の内より一首
我しをばじんすいたが程め長谷花ちの深き折をひと
とありなきは御史婦日信くしひくち徳の誓ひと
程めこの御託宣たのしおぼしめしとく小長谷ち

糸流あつて一七白の石通坂一のふし何の亦現てなり
 一ふまゝ一七白御遠海を記言妙智力を釋のふ境の
 七百の海を曉の着中よ正しく亦現してのなるは女史屋誠
 此能をまだがごとく宿命天眼を以て三千界を見たりは
 かまをなり屋を因縁の者なり一今強てあそゑんと欲をれば
 女史婦の内一人今余れがらるのいん如何ありおと者なる
 女史婦の申に御を言やさらきたと一人の余消いとる
 一かぶら一ふと授けまよせと怨ひはまば白色の蓮花
 を授むひこも我は女が子とす御一志う一なぐし世よこを此

時女史の申一人余終るべ一我を恨むことなれと
 告たまふ御女史婦ちよるるひむひ供具をそま茶
 致すのまよして下向まよしくなるふ後なくは余れお御
 懐胎あり一の豊成つた御後びぞかざらるる一は
 女よ十二ヶ月といふよあて方平十九年八月十日此晨
 誕中より生け産室の中光りかゞやまき昔も京都くして
 こころをかりたる豊成の御子成れ御け見えふは珠を
 みぐる如くをる始末なり御女史婦まよあひまよ二門の
 よろこひかざらるる法言此女が若く者珠酒をついぬ

て山より降りて空をふくみたるかふをむす田今天子の御愛
小たつとき傍一人事現ゆりて被横をす此家の御生
れ女子は疾く官名を宣許あるへくと昔多し忽親世
言と現じて南の宮子のをすす沖の友さめおよりて大内
云為原此仲麻呂を以て考成つたてて勅問ありよ
唯晨女子出生ありしは是奉ありんまはまよるるんす
まし中將の内侍と友名を勅許しあるまはまよる中將始
と喝く侍らぬに國是將監も南まはまよるの良女をま
ふけしが幸い小内侍が妻を沖乳母となきれ沛てあ

いあきうらざりたる

中將姫沖言々事

夜なく姫君二女になせあふはも秋の最中昔成り
御更ぬ姫を妹女にむかせ南殿におむひらまをさし月夜
誦たまふ姫君妹女は膝より下てあむじひ合掌ま
むひ沖初言に一首を誦したまふ

長言奉救世れちるいよありて女人成佛今を記せん
と沖あ親をそいめさるんぢうのく是をさるる各奇矣の
思ひをなり是直人まあふまはまよるるたつりりり

くまの天平二十一年に自量成つた大臣は任せられとまよ
り後に横なきのち大臣も命をなかり回く聖武天皇御
位を皇女に譲りたまひ孝謙天皇と申せりさて量成
は官位昇進の後ハも家の形を業ありいせの日く小盛なり
御く月日まゝりて姫君三女となりたまへば月夜小侍
は父母にちあつあつかひなりなく何をも女御后妃を信
んと養育しむひる將監が子に常ハ常ハ姫君の御
しん所をけり書物も護りルらば式部七女の子
子容ありけたりく白さあやうぞくよ純の袴をきり

に我の姫君に御慶而此多よ立よ姫君内より書物
を罷き異へ入せりい書改時をうけりたまふは是を
えとごめ怪をなすしつた終よ三女に姫君の御るを
ハそ夜ハおんむしりあふるがいふしてもゆたかき
なるば御皇朝父時常ハかくとめりるまじハ時常もふ書
もまご書あよん痛若妖怪此所をなりハ速よ退治を
べし其書此書を侍て時常姫君の御殿よりりもの
りけりい何の侍りところよあしけなひよして果して
童子来りて姫君と對座して童子ハ知の蓮花は座

一 姫君を白蓮花よき花にむし童子は問ふに
後世佛の道能く令ゆへにや否やと答ふに
おぼて安んじしむしありきと答ふに
おぼて安んじしむしありきと答ふに

いたす

佛は慈悲は皆くはるるの成界を皆悉なるを
童子答く曰

佛は慈悲は皆くはるるの成界を皆悉なるを

か同音に従へしむし漸く時遷りて童子忽ち至言

薩と云へし姫君を親世と云ふと云ふ童子は起立して

姫君を礼してと云ふ普現色を親世と云ふと云ふ

又さういふ姫君を親世と云ふと云ふ智慧光普照一切を

か大智至と禮ねしと云ふ佛所に入ると云ふ時常親子あるふ

思ふをねし歡喜の涙をむせび恭敬する重なることあり

なり実を大智を此言巧凡情の例りあると云ふと云ふ

是をりつてんが中將姫をまことに直人よあはれ人

よそまゝにまゝなり光陰をうつるやましく不となく去年

勝實二年姫君をや買入るなりせむしが春去夏うつ

て終はは過なんとするに佛親子二人後園にたなひ

月の歌も下娘をてゝあひくは御まの女房を
琴をたんと筆を吹色くなくさめなり御世真のりく
秋風より庭に薄さに開く萩の花も月よりして面
白くいと身を修したまひたる花より何れもなく一ツ
の狐出まると一巻の御経とくくもてて
の御側より来り彼経を娘君の前におきぬれおけ足玉の
彌瀆浄土經と印題ある御経也娘君んむい一首を口
をさこふ

法師の吾も授る御経は六ひつなるとや説教らう

別有りく時狐まると一首を詠じて云く

あふりもくはあまの法師の我名唱ふる人を道すく
かくれくく返あしてあは湯をうけて矣なり御史婦ハ
狐とんむくも娘君をまをて坊とぬむおなりまのく
こと極楽浄土に院めあまへ御史婦ハお史の
おをなり波経を冥むる組紙金泥の御経あり
をぬふそのき御経を踏ふありくくく別席はほくそ
娘君を授けぬるをくより中將娘ちくや御方とえなち
あははるるもふり女人此がくくお傳もなく自力く

清浦もれハ越後羅の過あまハ何をも知織る信を
も清浦しく清習ひたく思言物夕以裁恭致した
まふのこま

わ此方はふの危薨死なま事

あ其年もれく昭實二年娘思み支のま延生あ
もどめおろし柳花のさのりあるふ昔成つ沖支帰娘思
をばひもこの字よばひあふま風ふ笑ふ柳花紅白の
色を争ひ今を感りて嘆きこなたなぶめよあふ春此
色心とうきひたりと沖支の人もこころまつ

沖自沖酒家ありていと具どあ沖一門のく流
てられある今自柳花のばひこそ沖支帰娘思の
よそひをのぶる沖若さふまよは減は目か友とたいいと
あのかを悲しめあそよをなすく沖支のむおきいつぞ
や長者ちに系糸くそは娘ぐるをぬりく親喜此
御言ふは等冠を深きわく一人れ子を授るなり志う
なご下はよこ支の時父母の申一人きやうなるべし必ず
むかしあふれと若むあふあふ今ばよあやになま延二
人のあふはこら事なまよままにたうれしきなり

此と見ハ神佛も空云のりたるは佛菩薩の御
 告も一途は信用あづくしとの事誠な戯れ出於思
 也と云らば今此の内は佛菩薩を依傍し
 ぬお智安ふに護法の時神を祀りぬる今
 とは時とありらるるを俄に是よりあやふし雷電ひ
 かに東にさしはくともかくあつて汝何ぞ佛を妄
 語ありと云らや日月星辰は地は墜るは佛菩薩の御
 八変定して虚妄なると二世の末法をへり汝三年の死
 とへまを汝がせむる処の子成長の後ハ世の申女人成佛の先
 達ともなり候と身あまは善哉有せんとの法佛の加護
 ありて今も七汝が命を延ぶよと御あまを頼りてとくえつ
 て佛をひかふとるを鬼のつかぬとる風すまじく
 雷とて小落をんとを御まはれまよむと恐れつとの事
 むりりそそ忽絶入むひりり人々も驚き聲をそりり小言
 ると云へどもそのいなきは明證をとまね計よ各々心
 をほくせむと強もなり姫君慈悲歎法に堂を合せ
 三世の法佛を祀ね—実ハ我母定業必死なりとも
 此力致す今一交脚け親子の云をかせせむと

此力致す今一交脚け親子の云をかせせむと

の花もくわく法天宮津授なる御念佛をよばありか
く思ふ御修護まぐ忘れ少なきといへんさすく先
玉お御母笑ひと文宮むひあ片をよ念せも昔何好御佛
と思ふたまふく後をく水母月すあるは是よりまひ
醫業も更よ強そくもそよ御命も絶えんとせし時昔
命なり息の下よ豊成るあむらひくのもお六吾も今此
別せちどちりしかひくはむく達理の勢もをせし
心あふは君も二連れ川を身を擧ぐく後りむしごひと
ありしは豊成るいろくと曉しむひ実よけ考必滅の
こころりけは死のたつよ海せぬおんまのわたりしこもなるとや
く佛の力を頼るも佛して先達を海去しつらり達を
とけて待もく我達よとくまふはのまよ昔抱を吊ひ心
よも佛して一連小証すまへしとのむは水のあられ
しげふまをくく目を閉くおま世への漸おそいらに
豊成る今れ御あよこましく念点いつたり先よりせ
しるは皆しほまうなり思ふれ後もまづりやとらな
ら今このまをこ忘れしむいへん家子なりかなんなく娘
を憐れむむしうしとありしは豊成るあむらひ思なり家

も又報なまじハなるに 踏よまほきやハやまろれとのま
少のさうれ 一 かに娘をとりと 雙眼よ涙をうらめのを
小おとし 知なれども 母が末初めの詞を交むし世を幸
よりてあ親よ 情ものもあめ 僅みをえ母よをさ
とバあもはたあを 因縁ぞか けしをさ老を推して
冥途に赴く 悲さよ若成長せを 父母よ孝行を令し 慈
悲の心を以て人よを思ふ人よ 慈をたまふを又 母よ立
も父よも他の人よを思ふ 後の母よ 死る母よを思ふ切
りして 昔後せとも 予さべし 佛教よ 佛をあて 名所

その昔成りしと可愛の娘やと 後よむせび 佛ありて
娘を代えぬよ 陸ひ身を何ん院佛くと 唱たまふ眠る
びとく 息絶えて 豊成の娘を 始家門の人よ 哀も惜
ど帝さけびぬくして ある僧さくろ 方の下 命を定まると 業
とて 佛菩提 亦明養を こそ 佛養れと となひ 遂に 世
色花煙となり 昔も哀といふも あまりゆり 凡そ世の中此
を 度れありと 世に かくも 人の 心も 化やの 家
と 消るる 眼よりし 妻や 子よりし けりし 親子も 是を
あらしと あらと 世に 此の 煙を ともえ 人の 涙 葉が 系

此秋風ありて僅に名残とて白雲のこころを
昔人よも莫なき浮世をうとあもを流るる世を
うんまに中將姫ハ沖舟よまなまひく日秋悲ひ
小春月とてむひ秋夕香花の信をききうとて念佛とせ
ふか化るるなりりちちとなく一因もをばあは長き
のふとして河内院佛のそる信と遠下く先むひ明き
の利原和をを信得して開元信長とてむひ六月九日を
十二日まゝく板子の信を集めあむ七次の方清経ありなく
沖舟よといとむひあひるはるまはは平は唐の板姫の
あめの中は容顔湯火の菩薩言まよ兼く光明を故ら
いんよよありと小姫君あの中よ今の系釋惠と唐の系
よ泥きあふはいつちちちとていせあふとありれむ
本年今日付けせとさうりてはが母をうとてよ命終ふんと
むり時けが連のよありて河内院佛を祀する一寺称念す
信力よ五障の女人名くも極楽浄土よ信まし一気實在
者の蓮衣よなまをうとてこれ偏は浄地のむかきなりあは
解りりりし時さのこはせをもたむるは初糸いぐとなし
かまよこころ親子の疑ひとてえんあは口今姿を現す

此秋風ありて僅に名残とて白雲のこころを
昔人よも莫なき浮世をうとあもを流るる世を
うんまに中將姫ハ沖舟よまなまひく日秋悲ひ
小春月とてむひ秋夕香花の信をききうとて念佛とせ
ふか化るるなりりちちとなく一因もをばあは長き
のふとして河内院佛のそる信と遠下く先むひ明き
の利原和をを信得して開元信長とてむひ六月九日を
十二日まゝく板子の信を集めあむ七次の方清経ありなく
沖舟よといとむひあひるはるまはは唐の板姫の
あめの中は容顔湯火の菩薩言まよ兼く光明を故ら
いんよよありと小姫君あの中よ今の系釋惠と唐の系
よ泥きあふはいつちちちとていせあふとありれむ
本年今日付けせとさうりてはが母をうとてよ命終ふんと
むり時けが連のよありて河内院佛を祀する一寺称念す
信力よ五障の女人名くも極楽浄土よ信まし一気實在
者の蓮衣よなまをうとてこれ偏は浄地のむかきなりあは
解りりりし時さのこはせをもたむるは初糸いぐとなし
かまよこころ親子の疑ひとてえんあは口今姿を現す

なるとのむよとむし〜〜〜
今とひ起立塔像の功カぞありがごとかりる

中將娘一代記卷之二

豊成に後書を述べむ事

并ニ林葉管絃る事

婚君ある時父上にむこのむ事幼して母上にまなま御
かこももさごのむ事父上に御懐安思ひなるなり然く父上
ももさごのむ事母上を述べむ事〜
ひながと御沙汰もなかり〜の時を寝ひ折よそ〜御
勤めよりなれは豊成にも事を得と福治房に此御息女

照夜の光を要たもの豊成は照夜を討てての事六五人
の女あり能く学て給むが照夜用のい誠は姫の御事
産しよりむしとを平へりては昔成ははび果
妹者の所誓りしつらむらある夜姫を托着中ふきを喜
薩来りあひ汝前生の宿縁ありて入てえ後の母はあり是
汝は討ててとこの鬼因縁の結ひの考を述べて後年六方な
るさい能くあふべし陸を致し深き害はあつたよ心
へー吾ハ汝が母なりとなちまらぬの事よ入るは抱き免し
の中よあまきさめありりあるは姫をそのとも出のあハ
す晨昏孝養をすつてのあめ人と甲子代孝けん春と天
平徳寶正六年二月三日女帝の御事なるは梅花の御令
事よせし二云梅家の御意は集あしあまきよあま豊成
の御言も照夜お珠の中將姫、知れなれたわお官法も
暗しむらうのなれはるし守りあふた介法つた長の水の
能くくと冬内へ全浪むらけ沖は昇敷し並長た
の折がまきの花盛り桜梅桃李のをもとひ綿も
綾度れたたを列に者よをつつて花やふ粧ひむへば
振しりり節をたり元日は宗宮殿は出御ありて殿

感法がど即桃花の御酒をありはまは者ありくさる方威
を脱くぬひらちまよるつと斜なりが詔して云く今日
えけうの宴あふや管法を信くち平出をうひひを
あ金のてらまよとせんと勅之ありこれよつて内侍の司
をましくよわ知をなり一琴あつ琵琶筆の琴敷つこ
せうひちりきなりとあまこの樂さ狂りあめてよ上り
のここのつりま中將姫の琴の夜照夜あはせうの夜ま
介人皆をましく後後され者衣改をつくりひくちこれ
あつてとりくなりこま名家おれま中名家の秘曲を奏

せ下る事なれが太子も王冠を傾てるいふんの中ま申
將姫を今年ハ支の稚子ち改なりをくすけあまをなく
琴ひきあくとたんとあはれ着氣さぬつらの妙なりこち
とんくさなり一まよ深かんとむい今日の喜ホの長たる
と御褒美にあつりむかして照夜のあはせうの夜ま
れいせうあへのおはせひまやせされ吹せむいもの
能るに照夜あおなり習ひなを名指南とくく
なふ色つらふはまの女中代りて首尾よく調へも
君のあはれもつりくはれはまのた系合まのくるふく

をばりしる書名の能くも此のせんをたりたりけりや
をよむる猪母たるを妬世のおひるるは照夜前も此
女なきとすつらんよまをさるより終に娘を小くみ
そとめ思ふさうんもたうよらるさしは照夜も本年冬の
はより猪母の心地もせしが今年中秋あくる年産つり
らるるも留子そまうまれば豊成の御くらんるり清下
に別豊成丸と名づけむも終母の志よりいよく娘を
娘坊——むひらら娘をよき清成をとあけらむし便りと偏小
御てうといのざりたりらるる相まはば中將娘九女よなすト

せむひららある時父よふむらひのたまきく我なき母の御報
恩のため御報を讀とぬるあり父上の御誅を蒙りき
た御を清成——お借りたく侍ら如何御座せんやとあり
はしは豊成の感——男を別る侍を清——娘をのぶ
御を清成せむひらら志を彼借ちる感——扱く御年ふ
御志を指成つた実母報恩のなるよ——まうせん御志を
よまくひらら——こまをん御く侍らんとありらるは娘志を
たさぬ御法よりその目を流侍る父人なる御化原
世御を扱むとすつた吾知——て讀しつたなき御志

なまめて物又は裁するのなる 別は律儀とせ侍るとんせ
まへハ是より稱讚浄法経なり 別老宿お思儀の思ひ
をなす一ねくお思儀なるなりな家筋ありせしも此傍の技
らるも同じ一経なり然れば経を宿願ありて経なり
なるそふ思ひあふ慮うべと秘んころよ讀をへり始
君方ふよりとびむひ毎自心卷の浄経浄涌念りふ
事なり一お日たましく母上此浄墓所不汚てむひ
があもしたる如きのま色とらん多し浄慈傷の解ふ
希よ事く同もさびく見松風とるや昔の下に

ひくよとむひらちよぞ人く是を習く奈純ととまほりらち

山下後内中将姫と殺さんとすま事

今よ姫の徳母の徳とみ初むつまどく入るかちが姫を
の女あつるまよはけてまんかのめをとまのひぬ踏よま
豊事あれと云思子を徳世子成長の清の横たぞの家さつ
りせいせおよ徳とんと思ひ巧まをこしきよようつと或時山下
後内戴則とと共を倒さく拓き小声よありくやさるるハ
その方うのく知るましく姫と我といふ成無縁あやみ
交しにゑしとと思ふまんの編方を息し一いつ斗

若ぞや殊^{こと}に事^{こと}あり此^{こゝ}家督^{けとく}お續^つの障^{さや}とあり、娘^{むすめ}なれ、
何^{なに}卒^{つひ}汝^{なんぢ}今^{いま}肯^{かた}忍^{しの}入^い、何^{なに}者^{もの}此^{こゝ}は業^{わざ}とも知^しらぬや、と答^{こたへ}
よ殺^{ころ}害^{がい}して豊^{とよ}事^{こと}あり横^{よこ}を犯^{とが}の家^{いえ}を續^つば汝^{なんぢ}子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}と
才^{さい}の執^{しつ}行^{ぎやう}と一^{ひと}て汝^{なんぢ}夫婦^{ふうふ}を殺^{ころ}し出^でをなまに留^{とど}めしむ
偏^{ひとへ}に殺^{ころ}しなるとあり、れいんよく、^{おのれ}の返^{かへ}りはとむ
しと打ちなつと、知^しる娘^{むすめ}を殺^{ころ}えんと、胤^ねを殺^{ころ}めやせよ
しとなり、必^{かならず}也^{なり}、易^{やす}れと、鳴^なくと、流^{なが}るよ、^{かみ}用^{もち}をすむ
と、序^{ついで}を立^たて、徳^{とく}母^ぼより、こびらめ、^いれか、^の公^{こう}とせむ
と、めり、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今

目^めを御^ご事^{こと}の御^ご事^{こと}あり、^いれ、^の公^{こう}とせむ
い、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今
を殺^{ころ}し、^たて、^の事^{こと}あり、^いれ、^の公^{こう}とせむ
若^わ者^{もの}な、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今
い、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今
な、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今
く、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今
小^{せう}泥^{でい}母^ぼも、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今
く、^いれ、^の子^こ則^{すなは}重^{ちゆう}を、^{ひそ}か、^に招^{まね}くや、^いま、^今

そのてきつよめくみひむあそた装ゆは切付れりはつ
たも休るがほじは寧くなりよるとのりよろこび息を
つぎあす御殿よ見びのへんとせしあは肉より正帯は付て
御殿の外お着るもそまの老あくか答をせは打はゆる
とをくめく言ふ強き今音計し先延りしは後を
得ぬしと例なる松の枝を傳ひへいと志へあきあ家よ
迹向うぬさて正帯表よあさばたは元かくは切例とせてあり
れは燈打りよせ能く見よと別室なりははちよ強きあ
是何若のは業なるもゆがこまるなり怪しきをんたりと

くしと実つ者よそありると君の所るものあるゆき老もの
を妙念なりと深くぞと先父と別室をせし人を走する
まぞとりのりまよりしつと強きああも一人今御殿の表を
人を切しきおなり又別室を今白ゆ那へ糸通す定て是ハ
人まひなめしお運彼やよいら松明の光りあつこれ
もうづひもなま我子なりあふ強きき狗ふざがりしはれども
人よきもよきてはいろとととと知ぬ志を別室に今音
御宿するもそやせし何若の志とせらるるはかゝるところよ
あふせしやんはがく一老角は上北御宿を怨ひま

正常夜宜く寝入ひしと控くしそぞいお家よ海りか
あが科紙およかまおまし道りりむい

報ひある世のほをいふまよぬ親のるぞあつなり
とりのりよい流りて海を流しあけりやまよりく
のうくまよいひのつあもま君の姫君をい
と巧くいゆつてお方よ報ひ我子ひまよけ殺す
もけせより屋きお佛神の清悪もあまら
且いなりかみのるもまらどにせんひとく
いなるれよ上いをほいの縁して佛のまを

一命を限りよまをやし一命よのこまやと吊
おい定めて病まなりし云々まよ君の御眼を
小我家をちあてしまの傍をれもとりとさ
てぼいを吊ひりおんらふ別室親よ孝あり
よあ何り故よあ逆を及の父をまばなら
おもむいししぞりり記

後舟中將姫よ美酒をすく見たるお
公をどに豊喜壽丸今幸にありか天
一と長しやうふなりまは姫君此ちや
い海り

るはるし照夜のおいお子に成長するよはていよく姫君
といふ憎しお例りのほふち老女とおをうつても
姫君を多ひなむんとこのまひひる或時美酒を酒く
船子の申よへだてとそよ一茶とあの酒を飲んで姫君の
あぐせむしを待むひるおも姫君を豊喜丸とまじひ
綾母の居方よま事せむひはくおびもあよを能おあり
と綾母は兄弟に例よありとふくはくはくよあんなり
酒をまよせんとちあじきを指事り二ツのきと兄弟のあ
よあめて酒をすめんとむひるまよとくに目あよ人を教

とこれお事なれお胸おさるふさ下酒をといふこえよも
あふくくつうろくも目もえくずををりる魚をい古を
小なまひ右の方の茶の酒と姫君にのりたの美酒を
豊喜丸よはがしつては飲とたちまら顔色くもりわつても
休方もだへして昔りかんととまをりをり出てつあふ
いさあえ死でり綾母は作夫悲歎し津よ佛よ祈り
おしめをむいもなを津佛納文したま見おらうと
ふもをかりなりたぐくあさるべきあつたう姫君を事
小津佛を急しおふおよかく美酒のあふひのまむひ純

母あるに我子を失ふは是れ沈如母親世の利やく
なりとぞさるる悔しき

母の眩惑因火とぞあり事

さても先陰の流るごとく娘君十一歳は成むいぬ文書
つハ仲麻呂系良麻呂とらんをさせし事をもやく奏せざ
すしとよまうと流流した遷のひたりりこそ母はける
のりよ何そ我娘を失んとあこをりあふとくもいすは
ととげむいづ憤りしやまずて眩惑の一念因火と成て
娘君此縁ごころいしをわけのくるを角よと交りしとく

あふこひの我やな恨のの娘や若子をいせ成せ
と雷なりとさるきめぐりなるふよりて娘君一首は
よもなふ

あふこひの我やな恨のの娘や若子をいせ成せ
かく涙のたまひのそふもほめよ消去よりあつてもあり
をうをさるる事のおふりらるとをん実よ是過
をんぐの道ありとさるるなんが豊成つもあはし
なりとさるる事おはははくもあつるやう先年長谷
ちの親もよ初と悲のあまそ一子を憐れよと何と

して今よ賽せばはは四方山の幸色もうちうくたふす姫
ともたうくさめれたる糸結わんとて清更婦もろも彼ち
よ糸結ありく親世をらうと世表しむいとふ下向
ましくらが彼ちのをまの彼強者よ同溪とそ好色の僧あ
りふと娘君此津宮を垣りん意慕ひ枕心深くおひ深
しうといくまうくもたうくつぬまうくひまもたうく意いれ終
よ病の床よふしうきりくと意ひとまらるが彼がまに
盲牛とくものこれも同く無傍まうくそまをあらひ
来りてあらくの根子をばやうかたうすくあんまう事

なるは我よき候りあれハ先一草をまうてんやしくを同
溪よりこびよそす花をよて一首をうく

神の我ぬれくわいなを記意衣のけしおひを衣
かくくやりもまを娘君くし

あよまそんひるれ糸落きあぬ世風よ何をびく
とあへしあむこしをんて二人の無傍大よいう意の叶を
ぬいしをむししとあんを合せ娘君をしもそし一のうい
ころしそ思ひきと見と首之取いのりなまも娘君をま
通經念佛のらるまもやまにたまうくもなうくし

即ちの怨情は怨鬼のこゝろにあはくは死てなり滅す佛の如
かぶこそありてうらうら中將飛んよすはまをなせぬが
容色日臥造くうらうらをたのむいふんよ連し後
宮に備らう厚きのみし一徳此を以て清内勅の傍方を
あまうしつを始末ありてくみ戴しむひはくをえてそし
しむふまのうらやしきを一天の君のめしむふまを
よあまうてあうらうく侍まてもまがわやの時母を失ひ侍ま
むこそ報恩の爲續經念佛しふくちりえんをいふ
侍まは後文のほくも侍まなり急いふよわなひ侍まふ

まし何れ我清をきしきく清いめんを世にたくま
侍ると勅言しなふ徳はあせん方あくゆりてたて
養をきしむひはくは帝も名のまはくはまはくはまはくはま
あつて侍りたれども今殺すさうきいひのまはくはま
あふはあめは龍河川よなくのいふしそを若新道よひ
むよひまひすかしてえは帝の御心とありんはよあつてまよ
トよ命としてか持け命ありしつた後なすし女速くも
けなりをまの御心をやえんとまらべしさをまよ放て
ハ後文は内侍の候のあらべふまの宣旨なり姫君世勅を

更むふとくぞむりしもいそきたふとかく御乳母そのお
波多引具一 於田川いづりきたふよ川浪濤とく
てなりとぞろきその流せとくせんたり娘君おひ
たふたとい氷津のふるありとも昔のまの国なを
やさいをなまをべとて

浪より於田川も喜なると天の皇の悩やめてよ
かく泳ぐむひて川中よなけ入なふよあやふやと
よろし鳴動やるとは法師奇異のあひとあはと帝も
御のふれとなく御は氣まよせば物庭のくまや

大君となく娘君の和のくとつんとたふ
ひらふとくに帝はるのまよはるに流しや海むす
らのたまものぬとあぶたまのりーとらや

中将姫一代記卷之三

継母決言を向ひてはるるに申す姫を殺害せん

しるる事

去程申す姫世の用ひ人の敬ひありて威替りて業むの
津よ族の貴とくやと昔もは緒もくをぬむ世のあり
る女姫名成長ゆたりひに津に量もはるる事
世の人價貴やと就くは継母いよく眩意を息しむ
よ向ひむい喜む顔はるるよ海を深ゆりまむひも申す姫の

車ハゆのり物をとる七郎まのせせも大切やおひ言て
とてあをらんまはけさても嫉しやと心の恨み限り侍ら
けよ吾身ハ中々もあつたひと一産し子のこくおひ
何をも御后妃も立侍らんとめをさけり侍りしみ
あつたゆはと水狗塞り也もやは縁のりハあふ
ましと可流し御車も入りはるふ下この老の中侍る
時あつた局の内へおとせふものあり鳥帽子世世の人
んくハト藤の波もん侍りし儂しと世を祝ハは御
のよしまりの縁も侍る事あつたと思ひ侍りし侍ら

今くくト昔ハ比人のむ富もあつた侍りしひろく世よ
知り多し御家の瑕疵も御家の上の侍りしとまこと
しやふのむひも世を豊成御同ハ世の中のをあふ
ハ侍る事と侍りしものあり必ず實と侍りしあつたと又
入るむふりし侍りしものあり侍りし侍りし侍りし
むお我の侍りし侍りし侍りし侍りし侍りし侍りし
ひそくに贈るともせおひの御は侍りし侍りし侍りし
今宵始り侍りし侍りし侍りし侍りし侍りし侍りし
ゆのりゆのりゆのりゆのりゆのりゆのりゆのりゆのり

あぐらねいさく、（つひ） 咽るはより難のけさもを側て寝ひふに
果して鳥帽子（たかが） 垂垂（しんせい） 一んとする共踏をしてとゆうたる豊成
郷（きやう） こそとんむひさそてい人のやほるこそ実なりと大ふ怒りむい
心のち（こころ） 二井向いを比西自あるは合（あは） なる姉小といていかかることハ
ゆあく（あ） ありま（ま） 一とあひひはるふ極く憎きと振棄るは後宮
もも（た） ち（ま） ち（ま） ち（ま） ち（ま） ち（ま） ち（ま） ち（ま） ち（ま） ち（ま） ち（ま）
と云天聴も思とあり自分分けて控へし（ま） 一とあひひ一とあひひ
押さぬ暫く御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
まうせあり（ま） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）

いせ湯渡（い） のはゆ（せ） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
先ずも天子より勅命ありて法園巡見作（ま） けし（ま） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
今日登（け） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
ま（ま） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
中ら（ち） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
あま（あ） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
科（か） の（の） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
必（ひ） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）
今（け） 一と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま） と御侍（ま）

との仰なりは今日彼山とて首を打持ぬまよとて切はち臣等
申のまに持深海をすへし者なきは情なき世の利益に
目くまのしにありいと恨まじしはは姫君くく父上の御憤り
感るまは悲く紀のまの方へ身をかくとてままては恨まぬ
を結く連のくまのまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに
や一の世業ふまのしにせひとふ哀つよりかか紀の海
をまのしにまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに
一の申とて依況とてまのしにまのしにまのしにまのしに
まのしにまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに
飛下船を物しとて友をそと入のしにまのしにまのしに
まのしにまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに
ひまれのの世業をまのしにまのしにまのしにまのしに
一の御後とてまのしにまのしにまのしにまのしに
花の御世業をまのしにまのしにまのしにまのしに
りまのしにまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに
まのしにまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに
くまのしにまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに
むありまのしにまのしにまのしにまのしにまのしに

なるあり——とあり——と母上めきりく悲——と思をはらふとやたら
か——是因果のち本とをまへば今又父母をすつゆらむふ
道なり——とやく自ら首を斬り殺害せし後好く頸を法見
けふ衣ははくく宣く又よ見えませし下の小神ふ死法はこねん
ころみ纏く深き谷に埋くることよはま——とゆはれむ
あり又志げ——の君最後を侍くること——自ら毎日六巻の
浄土を讀誦するふ今はいま——深きま只今こそは讀誦
さあり讀経終了をぬむひ合掌——と念佛を唱へ
——と時首をさうらひ——とくまふのちあそもぬと見
浄土を讀誦——むひぬちを度たまたり引抜く御後よき傳
はり娘もも思侍るのちあそむい古塞く漸くこころを
終りむひ今こそよき事なむ——とまへに父上涅槃安んずるを見
一とまへ亡母の御いも娘の志き目を母上の二つ違は違ふむむ
りと見ありさうらひのち娘をまへ——とあま向ひ合掌——
念佛——とと信むあまをさうらひあれた劍をひきしむるは
君御後をゆりむむひあまをさうらひ娘も我れ失ひむむとよき
をち比よたけけり体たけり娘もあまのふかあ何や女もえある
ものつよは免角て自よもの思ひもやとやとく——とのむくハ

なまきやうく起しうるあこをぬらひしるは今中くはま
るあるあうらど従うる花の由質の倍して希なる湯心よ今
の由をまふの未思ふ素なれ心は徹一行は深うはしくも
くくは後よ御命を助もらん御命いつある御料よ達とて
も前これ宿因ならんく討もりく俵原を交るとい
くともあそ我敵ゆを百年を保んやけ上六御命を助け我を又
け山に隠れど好いといりくへへ御まうと御純母の中涼斗
なりと山に衣を中更己う役を突裂きく血をそくもねんらふ
認めさて姫君よや御命を失とらめ我ゆりく若はん
不審を起し御命を又捜しもるへ早く御りて御命を
御母らんせりん姫君よまけ奥の中よ思ひて今女をらう
させめつ明日の吉福を御目よりるへくを捨て山を丹
く御命のいこいそきく御命よ入く御館よりく速く
御監り者よいり討面して御りるは今朝来を御臺所の
御側へ右進御れ者ハ今女姫ふ美の者よりつくと文の
御いりはよもひそくに井く控御り御ありあり
く御命をくくりて迷惑ありく御命の命せんくあくせま
雀山に御命を御りて御命の御命に一つも御命を御命

不審を起し御命を又捜しもるへ早く御りて御命を
御母らんせりん姫君よまけ奥の中よ思ひて今女をらう
させめつ明日の吉福を御目よりるへくを捨て山を丹
く御命のいこいそきく御命よ入く御館よりく速く
御監り者よいり討面して御りるは今朝来を御臺所の
御側へ右進御れ者ハ今女姫ふ美の者よりつくと文の
御いりはよもひそくに井く控御り御ありあり
く御命をくくりて迷惑ありく御命の命せんくあくせま
雀山に御命を御りて御命の御命に一つも御命を御命

終母 終母のたのむところありらまうし西の女もな
胸けもり終母の甲分下神をり又末う腹を裂
血をそとぎ付て娘君の湯首を討なるは終母とせん
ゆりぬさうあり女奴を疑心ふりさるものあま首
これい合点ありまうし石首尾のまもりき公より
終母一血酒りさるやとまま推系はりなりとま
突くちこ驚き横子成さして思ひよ下さ終母のえん
下指も今朝之鬼の血信はり湯んまうし今ゆき
たまはは事なまもあふりふりひよくこれぞわ
吾妻去年おまをりよりまうし湯好するまお
目を見もふ娘君の血を祥なりいりまうし首尾く
んと小首を傾けらふ

時常姫 湯を湯りこま事

湯くまうして時常姫は扱るを及よく思案
かく邪智深き終母の心あま小神をりの池
中へ合点いさるまうし実の首をんせむん
又もや彼山申を扱まふもあまはめる事
んこあいつのてあま一りの我一人の娘

當年十四歳よりして姫君と同輩幸生し侍もお似れ
ハ是を御身替りよまては冠を救ひまんと身は定む
る身入娘を喰く申ふはと云ふ姫君りくくの事
よそ御身替り情を御命ハ助なきも付る首を
持留てんせよとの事あるは指あり冠なきなり女
よしく思ふへ〜君のたえん命は捨つて世に
ものたかりてはけは姫君の御身替りよまれば
今生よそも忠義奉世よそ去〜母は討死〜一ツ
蓮よ救ひあげられ上高乃是よ生を留〜めりあやと

言われぬ娘君りく申ふハ父の作何事いあるせんとは
主権ハ御身替りありなり命を捨ん〜あをりもあ〜
〜はあ〜首を打む〜〜御命を〜
かくて今君の命よの事御身替り〜や御院の御願よ
と御世よ〜と云よ向くよを合願〜の〜は御命よ〜
あ我父〜と御身替り〜御命を打む〜御命の
あ〜御命よ〜御命よ〜御命よ〜御命よ〜御命よ〜
〜御命よ〜御命よ〜御命よ〜御命よ〜御命よ〜
母此念を時〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜

小神よはくも純母のこゝろいふりてはるる娘君の事申す
討まり別馬首を執ふとせしと指おせも純母は
まうこひむひもなほの徳を更にとりせ末はち臣殿
官派をあらふへし世ものも討首をとりあるはなるに
人のちぬやふいぬへし今日の御方候なりと
まらふもなほをまを座をそく座よ好望も老よしり津
よしくもまの御方ありと十分首尾よくお願ひあり
け首八人のちぬへし埋とくせよものもあまはくも持来
はる大切なる御息女の事なる世に世名はあま病と被るか
湯葬りあるは海へ果は行時早く御心もあまをまて
たてよまを侍まると云指し我ぬありまを近はる今夜の
始候を云聞せぬも夫婦を雀山にまり力をたし湯男を
ある眞心かない佛神の御心も深るへし御心よく用とせ
よとて別一通をのこしと云く今夜もまの命と云くか
ら娘君を救済しなるとしと衆今をまては天虎の眞遣の
りれ疑くも末末は水却の苦患をまんとおそらへし娘と夫
婦法はほ世を指し法園はあまありし法りくも
おをかくもまの御心よまの御心よまの御心よまの御心よ

おをかくもまの御心よまの御心よまの御心よまの御心よ

君に對面したたいえしたてまつれし御樂おんがくをたまはすらひからひに要えい望ぼう乃な身みび母又
つるら比ひまそひを先さき在あらはひ多し御おん夜よをたまはせせまあのすまま
くよまも白しろももるるたれ御おん樂がくをたまはりし松のまよ速く又婦
いし側そばよけをひて今日けふの夜を息をあそりくあもめれハ
植うゑを集あめ植ゑを一第を共刈りく庭根ねをおろひ姫ひめ君
と赤糸いとをしせ書をはきてあらく芥子さいと福のを及く山さん林りんよ
入いくハ草くさを拾ひ取りたりて又又まま里さとあらく昔々むかし未いま終しまり侍乃
旅たび人びとを離れておのれをひ色角かくく世体ていはり姫ひめ君をいく
りもり又姫ひめ君を毎まい日にち祈いの願ねがひを讀よみし紙かみ名なを念
佛ぶつの音もうたれははりき日にち日にち成なりてあらく憂々うれしくも日日にち此こ約やく

の是速はやく世年としをくふらますく姫君を二に六の喜よろこびと迎むかへしひまり
おのれをいく浮う世よのゆをいく女杖づえも植ゑもれおろくあらく松井まついあらは
たハ俄とちにあらははり起りしたらも一の姫君もも書をいくをた
くくあらははりもも書をいくあらはりぬれバ姫ひめ君の御おん歎なげ
書の怨うらみを清きよくいたらし度の侍小せう葉はりるをいくを標め識し
とま姫ひめ君の力ちからをたらしてあらはりたらしますいくひあはりあらはり
はり姫ひめ君を後ごに命をいく紙をと求もとめて毎まい日にち祈いの願ねがひを讀よみし
紙かみを書きてあらははりしてあらはりたらしますの為近ちかくはしの為ためあらはり

ついでん
長谷をそとく 續經念佛あり 孫ふ事なり

豊成の志雀山持桶之事

豊成郷六八日の市娘を娶ふといひては海をふ
とよハ思ふさりしを海舟の舟ひまゝ 殺害せし中を父むひ
津懸歎かざるこころしんも 谷先き日よ津くたる例
よそ志むむよハあひも一日津の傍めく遊桶なるあつ
紀列鶴山よ多の多歎あること成守るま車よハ一ふむきあ
へ村の長池をり殺めの桶人を以集め惣勢を立てた成
故ち山中深く桶入たる豊成郷ハ小高を津よむり四方と眺

望しむよ幽なる谷ありきよ人の住らるや標のまゝくんく
りれ村の長を望見は誰人の住家ごとく同せむよ長きく
は山中ハ古より人の住居いびきより成感の怪むい相
と知るハ誰く見ぬハいふせき第の店ありこそ白よ容
色美麗なる女子甲子斗の婦とれよ居らるる御覧さ新々
幽なる谷のたふらるる女良の住べき所ハいづれは妖
怪の所ありと見えありと考ふるハおはけのひは未何者なるぞ
ま直よ名をふべし 在るよ怪くハ未んよのるぞと川渡り
く向まらるるあり 大よ騒きて松井の屋敷ハ平休くものを

もいそは娘君詞を和げけくやむ我を今く変化のまよ
あはは猶女の世を極託の若ありまよ深ちむべくは若成
こま成せりくあはは何ぞ村里に住むく女の方として
かろ山深く住む我惟ふ豊成郷を遊むくそえよりあむ
ふまをまよむ背に安をんむふ疑もるまよのま別れ
まりく父上たよりあはは家を蒙りく乃科ましく一彦成
一命今又ふ思後三父よまよなり教害せりまよとあはは
はま好くは娘後を取りて父上たよりふくり害まぬあ
まと思切あまの華治の考をりく純母の徳を依て父のふ

孝成蒙りけ山中よ己よ教さるべりくまよの武士松本あま
の情もを墓令取ゆりて今日まよハ活延ぬまよまよのり
の形をんは只と適く考をんは嫌くまよのあひりくま
却る山考をん掛らまよんといさて是れもまよのまよ
有るまよはれ世の中あまの今更蒙りくまよあはは思
百のまよよ教むまよと夫先よ向ひまよハ豊成郷も思ひ
あまをるまよあまのまよくま容を伸境まよふゆふまよ
あま中物娘あまのまよハ狗赤まよまよまよハまよのまよ
娘父のまよを蒙りまよハ果成まよまよまよすや我君昧

して他人の偽を信じて飛なき娘を夫とせし
而も天道未だを控めれば今再びは対面する誠老後
の幸と御飲を限りなり。姫君も御飲の後せきり成
御作多き我女を夫ひりより後人のまりの成る我子の
なきを悲し人の女の成長をそとく我子もあるふ此年
比あんのものをと歎き止言人を必狗を鳥し今聞し
るふ対面するいと偏再生の心成るとせよとて志を更
帰る厚き情を返すも御妙あると姫君を伴ひ松井
の後家法を御書に記し御親族を及ぼし上下帳ひ
さめりてくら純母を流石巧乃を引く故つめ
かけゆりて御試くくくくくくくくくくくくくく

中御姫を形を去のびく由麻も入あま
初く姫君十二歳なりと御安は増々素くす
ませへ顔く后妃もあまふべしとて御河伝るは姫君
いよを閉めひ我先の右難心御保く少も世上の業花を
よのよの王宮も御家も皆是火毒の内ぞうし只一向
よ浮世を厭ひ一心よ安き御判を怨ひ念佛せんと思ひ
あひくらすこととて御傳ふ御麻も御法の靈場御寶の

帝ち 勝地より彼よりあつく心静く動じぬしと傳ふに
定しむひ父よあな生る由暇をあれんとし
樂東花やうぬ糖ひ殿中成歩よあなまを浪りま
名所をすまれく先まのい波なり徳父よ出對を
りくるよえんと沖波をうねるまはれ豊成郷見むい
奴よ海波しむふぞやよむい姫君やしくお世く
父下の由教をんをりよ沖路もはるせのひしをんま
りそおもそむ波を鏡りのなりしとせおのた成郷
いぬのん中をかりむつる昔由命とくふも母のす

杖の弱くぬはるも親の老とせしめる老りの心せし
つなきこと感一あひくるそとりの娘ハ帝ハ一同に入せ
むひはまをと浪見む
風のあのもりび威やまろ老るるまよこのなまを
か一何まばるまきもこのごごもこのりあつたせの
あなともはをそぬ有ぬれ世兼花はほるまのこ
と一浪の中のだのひなれらるるまをまは
なつたちなりりしいとよまかりし有ぬの楽ねが
ま一六浄土ハ果たなりだちの浄例はるる

まのせんとおきてよまはし(も)こしな成(つた)ん
 素(よ)なり思(おも)ひのたをたちくそめの道(みち)入(い)てん
 ちとまことれ(ち)ちぬへの報(むか)ひ未(ま)だ世(よ)の者(もの)
 なりし御(ご)佛(ぶつ)も況(いは)ふなほ(い)まの(い)まの(い)まの
 侍(さむらい)くよあ(い)て佛(ぶつ)の道(みち)よま(い)まの(い)まの(い)まの
 花(はな)の甚(こ)よ(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの
 深(ふか)く(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの
 のけ(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの
 一人(ひとり)を形(かたち)も思(おも)ひ(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)

とあ(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 御(ご)足(あし)もとん(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 遠(とほ)く(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 中(な)か(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 れ(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 入(い)る(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 主(しゅ)領(りやう)は(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 業(ごう)息(いき)入(い)る(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 侍(さむらい)ゆ(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 未(ま)だ(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 見(み)る(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 世(よ)上(じやう)の(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 も(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 可(か)く(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 き(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 民(たみ)の(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)
 姨(いへ)なり(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの) 道(みち)は(い)まの(い)まの(い)まの(い)まの)

あり成りいし故にわし本陸のまの身の世の中もあつた
なり心受戒して先達し今の後世は弟兄も
ひい外いしを沢怒りくま判教をなすのあつと涙を流
し一玉へい主僧も心を感歎してそくは痛あ事
たうをせん習ひもよく困拵ししくかきゆく判判あ
るしと心前の老女を頼するしと老をすのせり
あしと去付多中お娘を老女の家ままも毎日凄
き佛ありもふとふしとふしとふしと何何園より
たうく四十年たりの尼とあましく當麻寺の境内に新小舎
を結び宿居して急佛もさせらるる姫君の事史及び
よくい若き女性の原さ思ひ入を珠指なりし前の
左弘ハ雑念多しと修りの際ももなりべしと宿室
こそ誰とふ人もたしくお静なまははまと物くたふあ
浄業を修し念佛といえんと有りしと娘を
いめる成佛の御行合ごとく悦び多し彼尼云の店に
入るひ晝夜をこころりあしく心静よ急佛しむも量感
の危難りま姫君んえさせあつたしく上下以ての外
強き法を人をきしは河山野のちりく清代ま思の主人

たうく四十年たりの尼とあましく當麻寺の境内に新小舎

を結び宿居して急佛もさせらるる姫君の事史及び

よくい若き女性の原さ思ひ入を珠指なりし前の

左弘ハ雑念多しと修りの際ももなりべしと宿室

こそ誰とふ人もたしくお静なまははまと物くたふあ

浄業を修し念佛といえんと有りしと娘を

いめる成佛の御行合ごとく悦び多し彼尼云の店に

入るひ晝夜をこころりあしく心静よ急佛しむも量感

の危難りま姫君んえさせあつたしく上下以ての外

強き法を人をきしは河山野のちりく清代ま思の主人

在東あへをり君求は陰陽博士の勅文、清命を恙なく
 一ある申よき清王所知るべしとありかくありては箱
 の中より書簡をとり又外より姫君を南麻呂にせよ
 清が御しとて笑へしと書成つる書一心を静め思惟
 してあひひたし又悉駭た子清が御るまじとて清
 父淨飯王制しむるやあまに姫君もしとて清
 心しとて御るも長く御るまじとてしとて一子も御
 とれぬ清王も生むるまじとてそのらふまじとて
 とて彼中よとて御るまじとて御るまじとて言ひ
 ありしは、八割姫君せん、尾公法をふけ、清命は
 君のなかりし、清命をばは、清命をばは、清命をばは、
 のこまり、今南麻呂の獲念流これなり

ありしは、八割姫君せん、尾公法をふけ、清命は
 君のなかりし、清命をばは、清命をばは、清命をばは、
 のこまり、今南麻呂の獲念流これなり

中将姫一代記巻之四

中将姫当麻与と判安と事

中将姫公年々夏当麻与め入せまふり信行急りあ

まもく祢瀆法去鐘を書写し秋八通夜祢名を佛

安香く妙果を飲来む(ケ)くを性昔の宿縁よけふふ来ふ

より来ふる(ケ)るに云同行とありむ互にお助く信行急り

懈怠なくはに云祢瀆法去の不可思義をりて我稱渡

五嶽之徒の女人心想靈芳の佛は此器の我ホけ佛の意坐哀

慙し救とんば何もの耐より安楽のち道とるまふと信佛

思の深く大なる事とあり須弥滄海も業とせらるるは是れ必
然りあり常の道を進むるは是れ業とせらるるは是れ必
心持願ひ相書念佛念うなくは是れ業とせらるるは是れ必
禪林のまじりあひまじりあひまじりあひまじりあひまじり
凡一の及べりし者も此の如く深く世のそりもなき
しと感ひて今自れをとりしとせん沐浴してちよ
ありむと云傳へらるるは彼も実持法とて三篇宗
のまじりあひまじりあひまじりあひまじりあひまじり
本年卯二月十日實報の沖夜刺して録の巻を著し三篇

戒を授り花の枝を以て器とて墨深の衣を著し一即戒は如
比丘尼と受得し終にお家此中まじりあひまじりあひまじり
よむせびむむらりそれよりして居室もゆるむを
尼を侍ゆる新尼の頂を摩く好むを似合ひあはれ持
の法婆よとよりまの佛弟子なりとすらくびあふとなり
いど多くても自も言はれ先の尼ははれむらり
のむふはねも御が怨ひのどくおれむむむむむむむむ
たりね昔はまじりあひまじりあひまじりあひまじりあひまじり
あはれ御が怨ひのどくおれむむむむむむむむむむむむむ

おまの乳衣をくく法をまきつ拜にあふ申よ金をまき
く糸勒れま像をけしあふぬ夜に公し形んく
てまひせし紐紙の御紙糸勒れま此書の中あり
是あしその事なりとま倍まうつとくよまねる
よ法如尼自第よ結まなりとて糸勒善薩者を憐れ
假し度云の取と取しむひく晨昏法の道を教へ導き
むひたるこそ有るくく糸勒善薩者まむひたり
滅し糸勒善薩は慈界六天の中才四の兜卒天に在り
とやせんよおれ糸勒善薩は天津を井のまといつる
ハ兜卒天のまをりあつる園は女人の障の迷園とまふ
く糸勒善薩よまきても尚三界に申あれ糸勒善薩の
園まきつ糸勒善薩は千の衆の中才四の障の園とまふ
のまきつ糸勒善薩はあふまは生まま糸勒善薩の園とまふ
速くまきつ糸勒善薩のまきつ糸勒善薩はあふまは生ま
よまきつ糸勒善薩はあふまは生ま糸勒善薩の園とまふ
糸勒善薩はあふまは生ま糸勒善薩の園とまふ

法如尼の糸勒善薩は二聖よ曼陀四珠を感得

く糸勒善薩

久しく彫ひ侍りあやう老尼の白蛇が八百の蓮を求
らぬよ流月の影なりあんとけまほは法めあり是自らに
くひひぐさるれいと豊成つて彫ひむへは事帝へ秀
聞しむへ御忍海の蓮子備えありくちわの日記に
三箇より十九日寸日ある日のついでに百枝の蓮の葉
七百八十百老尼及び法めまよ蓮の茎をわく糸をたか
ちの束めよ糸よ井を穿くく糸をほひ流る水は清く
澄りれども縁をみ色よ深成せり傍る梅の樹よりけく
乾を故よ後せば井を流井と云く梅枝縁無梅と名付く

あり同井に黄昏にたぬ歳斗り此女性を人あはく老尼
よむひ蓮の源洞ひやと尋ら老尼言くくやとく
ハ縁洞ひ侍り女性の白くくくよひ織くくくゆりて
機の道具を本堂の西の角よ梅く稲藁三把よ油を
灌柄くして糸を織ゆる小機の糸を軽く乾くして子母
三寸の筒よ方の人の手にまゐ一丈六人の曼陀羅を織終
り焼よむへ織女庭はくく何れや自らん一巻よけたり
とく一丈六人の手に節あり竹を切洞軸とて糸を
はめあたるよくしてく糸消夫ぬ御母曼陀羅と

の思ひ胸よりちりくまより 弥精進 聖國なる

三人乃ち女は如摩尼此中子となす

ゆるゆる如摩尼其尼を老尼の如傳よりく 曼荼羅の縁

起を悉く暗く淨く安心の縁を受得しむいひく 畫取

急りなく急佛しむふとや 海や吾朝も 経海傳

ありしりとも 極楽淨土の莊嚴を身よ 交斗りなり 哉

今法如尼の如よりく 弥陀觀音此二大聖を現しむい

あ樂國云の莊嚴とは曼荼羅よりく 一むく 今

此凡まかくちりくまより 世すの及より 事此曼荼羅の如

とく 遠近の國に寄はく我もくくと歩 我もくむ 貴賤街

は 瀟門前市成をせり 乃由よりく 更く 糸街をむいひ

中にも 曼荼羅を柳十六夜より 主上は 迎くはむいひ

らん 糸街をむいひ 此曼荼羅を おも 淨信心を傳しむい

くれは 法如人の 子女とまよひ 態に 曼荼羅の中縁

よの 別も 女の身は 六淨を 従く 深き 窟あり 故に

法佛は 悲願を 授けられり 淨陀の 如力 成程は 百千

恒沙劫にも 女人の 性せし ちりくまより 有るを 今世に

免角 後世の 一大事 成程と 急佛し せあり 教むい

三人の女子も陸奥に渡りむせひ下向せり止りて三人の
女性宿因深く内は宿りてや法は其尼の教化の趣は
深き事なり常なる世のあり貴も後先は其
ひわれは綾羅錦繡はかまはれぬ消せん其
命は世の身は其をこそ方事なれまはるや由麻守
にゆく後世は其を怨んと二人男ひと一かして客よ
御所をさびか彼らにもくは法を師とせよ其
身を若くは信尼を蓮尼正見尼と名を改ふ新念佛
と勤らまはる

禁裏に於ては法接園問答し事

このころに長谷寺に接園法師と名利の僧あり
其は香門品を讀み其大利を忘れ現世の福利と
る哉物と親を音の名称と稱す一人は教
親多法信をせむとく世のなきいれハ
在るの男女けむに法を法接園と稱す其福を
是は悟りけす方ぬ解る思ふらありぬ近江由麻守
に曼荼羅出現し其達之悪人五障の女思ふ
念佛とまはる氣冠消滅し其後其は法を其と教ふ

此に多佛性生の二門まきく陸よめさるるは是よりつゝ
接魯我年此後せんは試態ひはめを云ひ好子を
知くはるる情表るへのまははめゆく出せしむを
あくこまてはるるを卒たう是を朝庭と違へ弘法を
共にして因門の傍十之を合せは中より内へて考へ
るる法をそは彼をせりは三世佛は此通成なる若し
違ひの六佛門の人はあはむも由縁は法如邊は曼荼羅
を指する詞は父母成ころ止乃能人も一は十を此言佛
に中へ悦楽に生をまて云ま佛の教よりた邪法と云へ

彼は惑さるるもの多く稲麻竹蒂れとくなりは信正法
歎き上への世も顧正養へなる者なり且又を朝庭馬
の二のま女も彼尼を中してねん中いありなり
くは彼を百か朝庭めあはく福儀同言邪正法交へ
りまへと養へるは是よりつゝ法門邪正法儀を推し
つゝはめたと禁裏へると能方對論を仰付る
即ち百敬申めあはく座法西東もち東の座より
接圓若十條信並指より西の座へは如曼荼羅を悉く
只まへ座へ東より接圓とせりめ十條信並指

見 四つとくははたき悪く経文を引くはふととてあつた
り 同信之入時よ接中へけふハ教札悪信の急佛者も成佛す
るハ義偽りハ此ども明かぬ況澄を取むべしと題ぐら
ふ時法如瞑て弥陀佛を念トふにわ思ふや曼荼羅の
中央より光明放致く赫奕くして朝廷を照くはふ
のみ奇瑞と目たあつらん人ハ天子を始公卿大臣信心
謁仰の頭を低く曼荼羅を仰ぐはふ是時接中及
十人ハの信今ハ盡湯成んく我慢の幢を折ぐ皆
一回ハ南無阿彌陀佛と名を奉て曼荼羅成持し終て

弥陀の存影を仰ててを仰りては如の御文堂成卿
秋の夜より心く痛れ病めつとむむく老後の御心
法事ニ言とむハは如父の御館よ来りては夜中看病
急りたりハ業を進めむハ更にその効験なく日に
衰へば世のハ法如御花もとに奇くのお玉ハ今ハ何か
思百定らまひやせまのりの極南來佛の御園に生む
ふハ水世の樂果をり必く娑婆界ハ心我疎くもふなる
ま大智世書とくたの如きくはハ平常なり老少不定
の世の中縦ひ百年ハ壽成保といつた盧生ハ一睡の

善く修り生老必滅會者定誰と佛も教へるを凡ハ
進も任果ぬ深き只然り一と八極亦淨土なりと思ふ南無
阿彌陀佛と稱念一とひ今般の深と馬れさせあふなりし
怒上教むへむ豊成りも淨土とひしよと合く念佛
一とひ一とひとく淨年六十二歳より十月眠
どく三念ぬ一とひ淨性ましくなり法如も終ゆるべき
別とハ善く修り一とひ八極亦淨土なりと思ふ南無
誰の深き修りて淨衣の袂を縫むとひとく修りて
淨業凡事修り當麻も修りむとひ中陰の法も執

初ひのひなふ

法如禪尼正帯亡靈よあまふ事

一時法如熱をひむと古より佛門中人明師法法を
承んる法因法因抑一とひ陀の修りてまるとなるに昔
お家の身なりゆきと末一團をも巡行あるゆなりいざ
や進玉の善は正佛を巡らせんとく即人の此五戒修ひ
師弟三人紀別の方をんて一とひ修りて修りて修りて
云廣地野にあまひ一とひ日流ぬたふ記ぬれ早く入堂に
著んて一とひ歩をりて流る女性の足よりく復すく日るまで

とて我(わが)可(か)はる(る)にこちなくしとてそ(そ)の身(み)再び(また)對(たい)面(めん)まら(ま)事(こと)
とて候(ま)びのひたる(た)る(る)正(せい)常(じょう)もは(は)ら(ら)ぬ(ぬ)の(の)姫(ひめ)君(きみ)も(も)さ(さ)し(し)せ(せ)む(む)
や(や)夏(なつ)果(み)る(る)湯(ゆ)姿(すがた)なり(なり)と(と)後(あと)を(を)う(う)る(る)互(たが)ひ(ひ)古(いにしへ)の(の)御(おん)衣(ぎ)
む(む)ひ(ひ)た(た)る(る)涙(なみだ)に(に)ぬ(ぬ)れ(れ)も(も)あ(あ)く(く)更(さら)に(に)先(ま)今(いま)昔(むかし)の(の)湯(ゆ)体(てい)ふ(ふ)へ(へ)と
し(し)も(も)を(を)は(は)ら(ら)ぬ(ぬ)も(も)花(はな)と(と)う(う)け(け)む(む)ひ(ひ)る(る)ふ(ふ)や(や)と(と)夜(よ)の(の)夏(なつ)の
中(なかつ)に(に)彼(かの)衣(ぎ)が(が)地(ぢ)獄(ごく)ま(ま)ま(ま)と(と)恐(おそ)ろ(ろ)し(し)き(き)責(せめ)に(に)あ(あ)ふ(ふ)祈(いのち)を(を)ん(ん)む
い(い)ふ(ふ)武(ぶ)也(や)と(と)武(ぶ)也(や)悲(かな)し(し)き(き)の(の)も(も)も(も)た(た)ち(ち)彼(かの)が(が)ほ(ほ)く(く)責(せめ)られ(れ)若(わか)し
叫(こゝろ)を(を)ず(ず)く(く)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)目(め)を(を)え(え)ん(ん)あ(あ)ら(ら)り(り)臥(ふ)せ(せ)ぬ(ぬ)も(も)お(お)も(も)い(い)ふ(ふ)言(こと)より
所(ところ)も(も)果(み)の(の)店(みせ)も(も)な(な)く(く)但(ただ)法(はふ)華(け)が(が)糸(いと)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)草(くさ)芥(かゝ)り(り)

ら(ら)る(る)暮(くれ)雨(あめ)し(し)は(は)ら(ら)ぬ(ぬ)い(い)ぬ(ぬ)ふ(ふ)の(の)正(せい)常(じょう)未(ま)だ(だ)二(に)界(かい)生(せい)死(し)な(な)ぬ(ぬ)離(り)
せ(せ)ど(ど)悪(あく)趣(しゆ)の(の)若(わか)愚(ぐ)し(し)況(きやう)む(む)ず(ず)武(ぶ)吾(ご)よ(よ)若(わか)ら(ら)ぬ(ぬ)不(ふ)便(べん)な(な)法(はふ)
彼(かの)衣(ぎ)吊(た)り(り)ぬ(ぬ)れ(れ)し(し)と(と)う(う)互(たが)ひ(ひ)に(に)鐘(かね)を(を)漬(ひ)ま(ま)し(し)と(と)く(く)も(も)を(を)見(み)
む(む)の(の)彼(かの)源(げん)の(の)良(よ)常(じょう)が(が)信(しん)念(ねん)を(を)記(しる)した(た)る(る)暮(くれ)雨(あめ)は(は)ら(ら)ぬ(ぬ)い(い)ぬ(ぬ)
あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)正(せい)常(じょう)巡(めぐ)見(み)の(の)信(しん)念(ねん)を(を)け(け)祈(いのち)す(す)る(る)病(びやう)死(し)し(し)ぬ(ぬ)糸(いと)放(はな)け
祈(いのち)す(す)る(る)埋(う)め(め)し(し)ぬ(ぬ)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)い(い)ぬ(ぬ)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)い(い)ぬ(ぬ)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)
生(せい)書(か)寫(しや)の(の)御(おん)衣(ぎ)代(しろ)り(り)ぬ(ぬ)か(か)ら(ら)ぬ(ぬ)波(な)を(を)中(なかつ)り(り)納(な)め(め)む(む)ひ(ひ)え(え)
一(いつ)回(かい)ぬ(ぬ)村(むら)濱(はま)淨(じやう)土(つち)鐘(かね)を(を)漬(ひ)ま(ま)し(し)ぬ(ぬ)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)い(い)ぬ(ぬ)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)
と(と)も(も)い(い)ぬ(ぬ)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)い(い)ぬ(ぬ)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)い(い)ぬ(ぬ)ふ(ふ)の(の)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)

巡礼修りありしなり

中将姫一代記巻之五

四人の盜賊蒙教化事

さてははぬ沖津書字し効侍ありてさぬ長遠あり
かば浅糸と衣振の侍を捧るるおびくくし福道口
の盜賊四人をさす巻室よりおびく入店とを刺殺せんと
死しし武取身び入たりか中子の法立尼をさす眠入りが
は如尼の通取経を讀み佛してさす四人盜賊おのけ
より窺見ふははぬの良女佛者と現は梵天帝釈前後を
圍むる佛市の地的幽なる侍も照輝とさるる白目

しとくありこれ盗賊に付斬るんて方よ警まひくふ
生佛を殺害せんといふことぞ深なる悔にして後悔
しこれより法めんの前よりありし一弟を憾悔
しし上六何をも以て弟子とすし一弟の香花の由緒
仕を致し申すといふ人一弟よ誓をとり法を御前
わくこれ法めんの前よりありし一弟の香花の由緒
又ぞとて人をも生かすありし一弟の香花の由緒
深なるもあつものぞく一弟よ改く道よ教く是又
吾人ありし上六何をも以て弟子とすし一弟の香花の由緒

一と法んころよ教訓しめよ各くころよ法を
流し悔りるるる自既よ判髪深衣して来りるるそれ
より常々南無とて来りるる佛圖の掃除なりるる
ころや

山下夜月法めんの法尼よ憾悔の事

法めん今年に日歳の暮もよやく後行柳柳の由よ
うこれ法めんの法尼よ憾悔の事
多佛しころよ法めんの法尼よ憾悔の事
法尼の信もよやく后行柳柳の由よ

今世もまがらひにまがらひに姫君を害せんよあの一に死忽
 むとひく親此よにけし一子に殺すよ世も省ぶ
 事ありすし忽死に成る判安く此言と名を
 改法四條のしりし十六年此津のる死誦經多佛
 後一かた子まは姫君も今も神あふすよはま
 御存の御同もあつ首の死業は懺悔い御許
 一に成りしと推し流せしと涙を流しませしハ
 はめ浮尼もさうさあひひ信よはよとさふさく
 有ぐとも懺悔也者一今も是を恨むと必成せしむさうと
 ありて別勿倅改と古聖ものこまハ一急発起菩提
 心終りを悔むらる事さう悔急なく急佛一と
 ぬんろよ教訓いむハ此言もよく涙よむせびそれ
 より迫きもさうは度成修ひ誦經多佛意なくつとあ
 らう

高安郡清女お家事

宝永三年壬子の正月に此に其母なる女房の房室に
 来り髪をおろしお家せんといはれ給ふと来由を尋り
 ぬ本河内高安郡お塚村の若しとて名を清女といふ

づくおしあしついでまの二周もさあめりなれ合ふせぬ
も乃理あれたま考き日くぬ諫しつち月日もまを六件
人まつて向く疾くし心たのしむりける清女まのが
まも平ひくく又新せり毎な来りくまじやんをいへ
くおれひひも此油まくりよりみ塚のつれ思ひも南麻ちま
巡法はぬ淨尼と師才の物をまうお家の平まを返らるる
さらぬにまあよ八清女まま方知れはく所の考かこと
得もあつしことほぬにけ方を知しに別る新せ神我
意慕ふ女のゆるめれは近國壬午のころくまへく君まはる方

かまじいばさしてはるまりしを意從く海川もまをまづ
めさなまのしおれひがしはゆきし免罪りりるるとま
年のまま清女の人南麻ちま系信し波清女よ合し
今ま出家して好ま尼と名を改はぬ淨尼の居まをま
く香衣の位まを移り免罪佛しちまをりしは信く
ましく新せ神あめりま清ま十一年ぬあ林あ表のまま是のま
ま柳十六歳といつるま人も彼法如の勤めりくまあま
形くまらりし家傳ふまらふま又けまも彼をぬくまあせ
しむくまもくもあまはまなりはまもてけ恨を報せんま

史そののらじしおしひるるの言才に波南麻の屋室より
好まむ尼がゆりの若しとる未成ハ一宿に由ると一も時
友成ゆき法を判らる一母のめく好まむ尼が首と打て
見民のめしひを晴さんと思ひてさやふか忽南麻さよむ
かりこておふ思ふなりハこそ未成法を尼の友よ曼茶羅より
先う法をそり河津院の法如よ若く曰明日夕陽はけ
高あ勢ゆる并新七良とてこのゆき悪法合く来るべ
はしく教化ししくゆまゆしと若きりりり果して
聖なる法を彼の人來りてあ内とてなる好まむ尼の友

日次新よ系文をしくち内は痛ざりたる法如也よま若きもの
小き方ハ河津院高安勢ゆる并新七良とて若くはまけは法如
恨と合まかりとるけり清女があせり一昔法と勅是よ
あはれ近來まよ法は有るの世界といひ目か登起
しと出家と遂たり親属のよし一礼も省べきと吾よ
恨とらん得ゆと新七未と一ととまよさざりしよあくも是
と知りまひ及法を責てのよハ新七もよ法をさ勸是
まづ一ものをもいひまづりしつ御習く法如の若よ跪さ
頭を低くゆり系ハ誠よ果を怨よ心まよし道なき恨

を合あはし言外ことばよりおぼさざりし然しかどもく見徹みとおし
あふし津つに出入だいにしするまどわく権者けんしやを殺害せつがいせんとも
ひし浅あるあふし後悔こうかいし返かへを流ながし懺悔えんげし
ハ法はふも波なみの葉はし成なりし生死しじ常じやうの理りを
況いはずし縁えんんごらよ教訓きやうくんしむハ彼かの男おとこもく既すでにの
と流ながしそ夜よ宿しゆく室しつ室しつよ希まれし望のぞむ曼まん茶ぢや煎せんを
結むす縁えんし河か列れつの河かりし行かりし道みちもあふしを初はつ道みち
と名なまし法はふの終しゆうのまふ道みちの思し慮りょしはあふし
法はふ如にょ淨じやう尼に法はふ人にんハ曼まん茶ぢや煎せんを就しゆう同どうしむあふ

寶たから龜かめ五ご年ねん申しん寅いん法はふ如にょ八はつ歲さいの至いたりし
の母はは也なり離りてより來き年ねん六月りくご廿にじふ日にち廿にじふ日にちの至いたりし
さうらぐりち多おほし七しち歲さいの阿あ比ひ陀だ如にょ來き老らう尼にと現あらは
大おほ曼まん茶ぢや煎せんを扱あつかむひし今いまより十じゆ三さん年ねんの由よしを必かなず
成なり迎むかふ也なりの御おん誓ちか約やくなりある也なりハ吾われ母はは也なり波なみを
んし今年ことし洋やうなれハ命いのちの内うちよを忘わすれしは御おん執しやく行ぎやうふ也なり
とくも日ひ六月りくご廿にじふ日にち廿にじふ日にちの至いたりし仲ちゆうをの由よしも同どう
八はち日にちの由よしも同どうの流ながるを流ながし丁てい寧ねいの佛ぶつ事じ修しゆ行ぎやうを勤つと
仍なほ多おほくは奉ほう滿まん座ざの御おん誓ちか約やくより法はふ人にんを招まねき集あつめて也なり

才二の曼荼羅の在る定善十二観の體想をありく
 織著一むふ才三下色一六極浄土の上界より下品
 下界より上界に浄土の因縁を織成せり
 次中央より極浄土の正法教の體相寶池宮殿樓閣を
 池の七寶樹林園の充華菓枝葉互に輝き八功德水乃
 池の中より青黃赤白の蓮華咲乱れ各々色あり三千
 六百の億の光明朗々照して相好蓮山の如くを佛眼して
 微妙法を説く凡地上地下の莊嚴より虚空より法の
 樂器空中より列りて自旋妙聲を三寶法波

衆密寂滅無生忍等の法を説く
 なるより法々二千萬億那由他恒河沙由旬の阿彌陀佛の
 身量八万四千萬の相好光明のつたりなるなり今法
 の清浄なる法の上界人と下界人にて迎渡の梵音より
 況や一むふ妙なる法をを聴きて一むふの菩薩
 及び土の流生のところなる十方仏土よりありて教の念佛
 性生れ人皆同じく三十二相八十種好の覺體より自旋の
 妙法より、是無量の聖象水逝よを與ね推くを教
 より樓觀め登り十方浄土を照してあるハ寶池は浴

有罪無罪俱とも當來たうらいかなるか彼かの云いはせせてて觀かんるかん勢せい至し普ぷ
現げん文ぶん珠しゆととひひくく蓮れん花げををななるる處ところんんとと能よくなりなりととなりなりくく
ののくく法ほふ如にょ危い日にちををああとと修しゆくく契けいとと洗せん亦またととくく聽ちやう因いんのの
法ほふ人にん信しん歡くわん喜ぎのの涙なみだをを流ながししものものをを所ところををななるるををとと踊おど
懼おそししてて也なり退たい教きやうせせりり

法如尼修終性生事

人にん皇かう軍ぐんのの代だい光かう仁にん天てん皇かう室しつ飛ひ六ろく年ねん乙おつ卯みづ法ほふ如にょ禪ぜん尼に廿にじふ五ご歲さいのの
法ほふ熱ねつ性じやうのの狀じやうををひひままよよ吾わが身み十じふ六ろく歲さい中ちゆうてて世せ上じやうのの塵ちん跡せき
ををののままはは禪ぜん林りん入にりししよりより心こころ來きたり唯ただ自みづか今いまとと過すま行やくををたた

ををやや十じふ四しののよよ乃すなはひひ誠まことはは年ねん月げつのの推おし遷うつりりとと同おなじじななくく十じふ七しち歲さい
のの夏なつ年ねん生せいれれ志し願げんももやや一いつ日にちをを三さん日にちのの曼まん荼た羅らをを感かん得とく
しし朔しやく夕しやく想きやうをを愛あい相さうととしし連つらくく蓮れん華けにに託たくせせんんとと法ほふ求もと
むむとと此この化け來らいのの禪ぜん尼に告こぐぐののむむかか今いまよりより十じふ三さん年ねんをを由よりり
去さるる月つき必かなずず汝なんをを迎むかひひとと言いふふ今いま年ねんににもも由よりり爾したよりより
台たい婆はのの苦く城じやうはは在ありりとと今いま月つき亦また月つきををりりかりかりとと昵ちつ迫ぱく
比ひ丘きう尼に流りゆうとと對たいししてて水みづままににくくれれ我われ告こ淨じやう土どのの再さい會かいをを契ちぎりり
むむひひくく爾したよりより心こころ來きたり生せいののむむよよ何なにれれハハ世よののののハハ
ほほよよまますすとと一いつののああららはは誦じゆ經きやう會かい佛ぶつのの外が他た事じななりりととすするる所ところ

陀の連絡を海よりと多く三月下旬よりぬれ櫻
梅桃李の爛熳と咲はくをらんりよつげ澄のま近
ささく七寶珠の萬ちを弄むる唯今あり心も勇ま
く出入の息も稀名念佛の外地よりなりーが十三日
の夜め入を洗浴しを清の盥嗽く西向く端
坐合掌しを養生の時勉と清らけりぬる遂に十四日
午の時正念めして眠りがく息も終るせむ耐
はるを虚空よほほひ冥香四方よるん下るふまのよ
よつろく光明唯ましく化佛菩薩の迎接を得く靈瑞

安室の養生を遂むひりなりは吳陽を見聞はる老若
貴賤ち肉より集り菴室を圍繞く清苑の
を流し回る念佛しを清苑より者殺を考るに
とやことばは法比丘尼の入菴しを菴室しを
庵と号し後護念院と改む代は比丘尼流して曼荼
羅堂日ごの修老法事急をのりりー寛心
知恩院の中譽實山といへり僧はを相持せしより
僧院もまあまより今ふかご毎年は尼の正忌を迎
接會法執りり今南麻と練供養と云ふことなり

卷之
抄

